

南半球便り（その 38）：「恐怖の鳥」後日談

10 月 1 日

「恐怖の鳥」ことマグパイを取り上げた[南半球便り（その 30）](#)は，お陰様で大変な反響をいただきました。今日は，その後日談をご紹介します，マグパイ談義を深めようと思います。



飛び立つマグパイ

1. 日豪をまたがる反響

実は，この南半球便りは，私がまずは日本語で執筆し，その後，大使館の優秀なスタッフ（JET プログラム 0B）が英訳してくれています。そして，日豪双方，さらには第三国の方々に提供しています。

興味深かったのは，「恐怖の鳥」に対しては，国境を越えて多くの読者から様々な反応をいただいたことです。日本では，直後に TBS テレビがシドニー通信員の飯島浩樹記者の味わい深いレポートで「恐怖の鳥」を取り上げてくれました。[YouTube 動画](#)で 40 万強（9 月 27 日現在）も再生される程，注目を呼びました。

豪州では，オーストラリアン紙の人気コラム「Streuth!」で本記事が紹介されるとともに，多数の読者から心のこもった反応を直接いただきました。私自身マグパイについて大いに学ぶことができ，改めて御礼申し上げます。

2. 限らない愛着

豪州人の反応で印象的だったのは、総じて言えば、人を襲う習癖があるので警戒する必要があるとしつつも、愛すべき鳥との反応が大半であったことです。可愛いペットだと言い切る人もいました。確かに、ガラガラ蛇やイグアナを飼うよりは身近でしょうね。

面白いことに、餌をやるべきか否かという点に関しては、豪州世論は真二つに割れていました（笑）。豪州外務貿易省（DFAT）の知人は、自宅の庭で餌付けをしている画像を送ってくれました。他方、私の拙文を読んで、「自分も絶対に餌はやらない。」と賛同する人もいました。



警戒されつつも愛される「恐怖の鳥」

3. 現実的対応を迫られる日本外交官

そんな中で、注目を引いたのは、「マグパイは餌をくれた人の顔は覚えていて、襲わない。」という、餌をやる人のアドバイスでした。一度ならず湖畔でスクランブルを受け、肝を冷やした私にとっては、魅力ある展望です。ただし、「筋を曲げない。」ことを外交官人生のモットーにしてきた私には、自ら餌を振る舞うことは全面譲歩になるので、強い抵抗を覚えました。



潤んだ瞳でジッと見つめてくるマグパイ

そこで、妥協。今までは、毎朝、潤んだ瞳で餌を乞うマグパイを尻目にヤクルト（豪州現地生産！）を飲み干していたのですが、そうした挑発行為は控え、餌をやる宥和派の家人の背後に黙って立ち、恩を売ることとしました。その成果か、少なくとも公邸敷地内では襲われることなく、平和な春を過ごしています。

4. 事件発生

出勤途中のことでした。この時期になると、鴨が雛を連れて行進する光景を見かけます。その鴨の家族をマグパイが庭の一角から追い払っている姿を見たのです。「領域侵犯」に対する対抗措置なのか、鴨がまき散らす「落とし物」による環境破壊への抗議であったのか、原因はわかりません。しかし、その剣幕には驚きました。



大使公邸を行進する鴨の家族もマグパイの被害に。。。

それから数日後。庭の片隅にマグパイが不自然に横たわっている姿を見つけました。近づいて覗き込むと、既に息絶えていました。マグパイ同士の仁義なき抗争の結果なのか、他の鳥の襲撃によるのか？鳥の世界には人間が気づかり知らない秩序があるのだろーと思いつつ、生き抜くことの厳しさと自らを守る力の大切さに思いを致しました。

5. マグパイはいなくとも

ここまで書くと、「マグパイの話だから自分達には関係ない。」と日本におられる方は思うかもしれません。そんなことはないのです。

「恐怖の鳥」を読んだ英国の元情報機関高官が、「東京にも恐怖の鳥がいる。」と教えてくれました。この貴重なインテリジェンスによれば、半蔵門の英国大使館前を通る通行人やサイクリストがたびたびカラスに襲われる由。そういえば、外務省のインテリジェンス部門の私の後輩も襲われて自転車から転倒し大怪我をしたことを思い出しました。



東京のカラスは英国人にとって「恐怖の鳥」

もっとも、当該高官によれば、このカラスは、「MI6の手下ではない。」とのこと。確かに、ジェームズ・ボンドはバットマンではなく、鳥まで手なずけているわけではないようです(笑)。

6. 忘れちゃ困るとコカトウー

マグパイに加えて、豪州に来てから気になって仕方がない鳥がコカトウーです。その純白は真白き富士の気高さを想起させ、その黄色い鶏冠は「他の鳥とはリーグが違うから」と言わんばかりのプライドを醸し出しています。

ヘンデルのメサイアの中で、「King of King」, 「Lord of Lord」に加えて「Bird of Bird」と合唱するとすれば、私の頭の中にはこの鳥の姿が浮かぶことでしょう。

余りに鳴き声がけたたましく、静かにしてくれていれば、もっと風格が増すのですが・・・でも、遂に大枚をはたいて置物を買ってしまいました(笑)。



我が家のコカトウーの置物

カンガルーやコアラの他にも魅力が尽きないオーストラリアなのです。

山上信吾